

[成果情報名] モモ「なつおとめ」におけるみつ症発生の特徴

[要約] モモ「なつおとめ」におけるみつ症は、糖度が高い果実、硬度が低下した果実、また、果重の重い果実で発生が多い傾向が認められる。また、極端な大玉生産を狙った、早期の着果制限は、みつ症の発生を助長する。

[キーワード] モモ、なつおとめ、みつ症、果実品質、結実管理

[担当] 香川農試府中分場・栽培担当

[連絡先] 電話 0877-48-0731

[区分] 近畿中国四国農業・果樹

[分類] 技術・参考

[背景・ねらい]

モモ「なつおとめ」は、西南暖地において盆前に収穫できる有望品種として導入が進められているが、果肉の一部が褐変したり水浸状になる果肉障害“みつ症”の発生が問題となっている。そこで、「なつおとめ」におけるみつ症軽減の基礎資料を得るため、果実品質との関係や結実管理の違いによる発生の特徴を把握する。

[成果の内容・特徴]

1. 果実品質とみつ症の発生程度（無～甚の5段階に区分）（[図1](#)）の調査によると、果肉硬度が低い果実ほど発生程度が高くなり重症化する。果実赤道部の果肉硬度が、概ね 2.3 kg以下の果実は、みつ症発生程度が「軽」以上となり、商品性を失う（[図2](#)）。
2. 同様に、糖度が高い果実ほど発生程度が重症化する。果実の糖度計示度が、概ね 14.0 以上の果実は、みつ症の発生程度が「軽」以上となり、商品性を失う（[図3](#)）。
3. また、果重が重いほどみつ症の発生果は多くなる。特に、極大果（341 g 以上）で多くなり、発生程度も重症の「甚」の果実が多くなるが、小～中玉果（290 g 以下）では少なくなり、重症の果実も少なくなる（[図4](#)）。
4. 大玉生産を目標に、摘蕾と早期の摘果を行うと、極大果の割合が増加し（データ省略）、果実の糖度も高まるが、みつ症の発生が助長される（[表1](#)、[図5](#)）。
5. なお、みつ症は、収穫後の進行は認められない。

[成果の活用面・留意点]

1. 果肉硬度 2.3 kg以上での収穫がみつ症軽減の目安となる。

[具体的データ]



図1 みつ症発生程度の区分

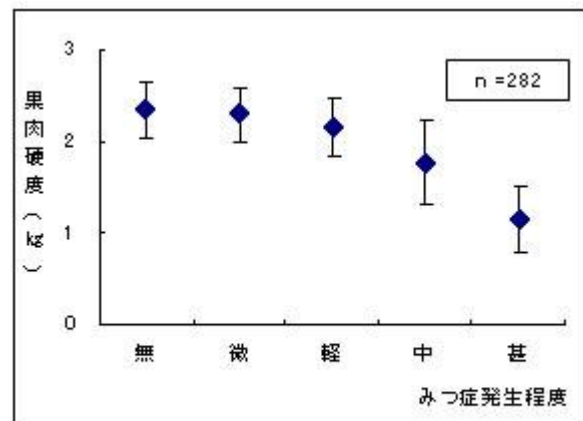


図2 みつ症発生程度と果肉硬度との関係(2005)

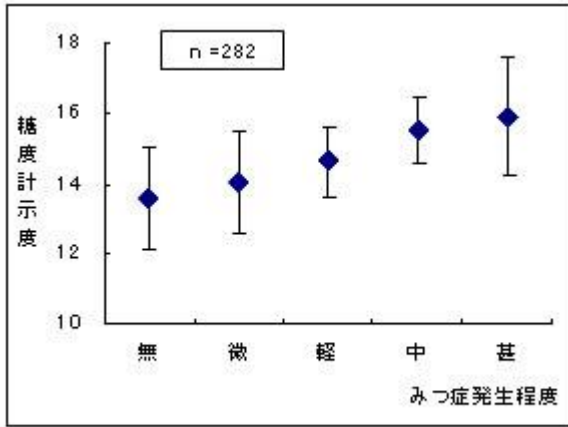


図3 みづ症発生程度と糖度計示度との関係(2005)

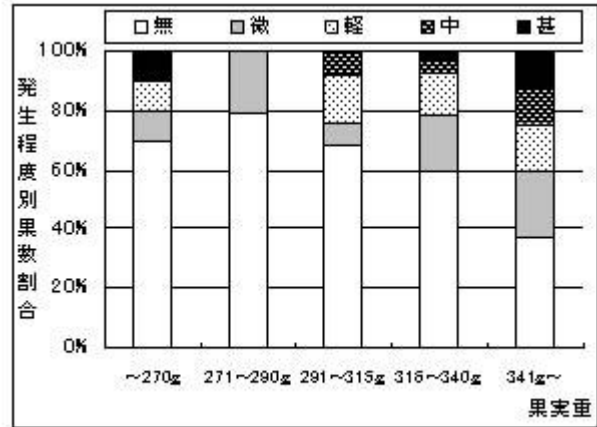


図4 果実の重量区分とみづ症発生程度(2005)

表1 結実管理方法の違いが果実品質に及ぼす影響(2004~2005)

試 験 区	1果重(g)		糖度計示度	
	2004	2005	2004	2005
摘蕾+早期摘果区*	357 b	350 b	15.2	15.7
早期摘果区*	357 b	319 b	14.3	15.1
後期摘果区*	277a	247a	15.1	15.0
有意性	**	**	N.S.	**

**は、Tukeyの多重検定により異符号間に1%水準で有意差あり。
 z: 摘蕾(開花前)及び予摘摘果(摘果後20日目)のみを実施。
 y: 予摘摘果(摘果後20日目)のみを実施。
 x: 仕上げ摘果(摘果後40日目)のみを実施。

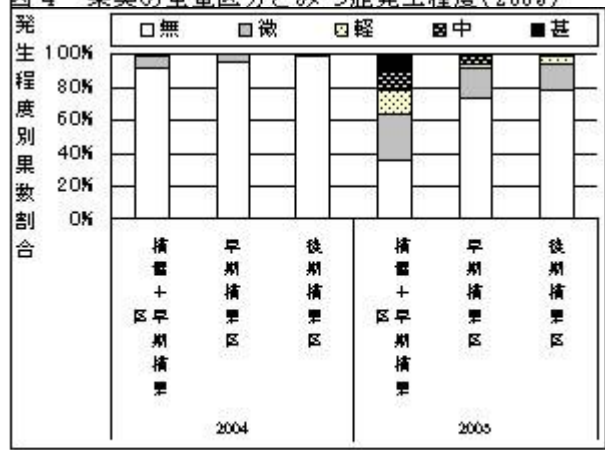


図5 結実管理の違いがみづ症発生果割合に及ぼす影響(2004~2005)

[その他]

研究課題名 : 果樹の高品質安定生産技術の確立
 予算区分 : 県単
 研究期間 : 2000~2007年
 研究担当者 : 坂下 亨・山下泰生・福田哲生
 発表論文等 : 坂下ら (2006) 園学中四国支部要旨 45:4-5